

フッサール初期志向性理論における「志向的对象」の位置

富山 豊

1. 課題と手続き

「固有名が向けられている志向的对象は、その名前の現実の(actual)担い手ではない(Bell, 1990, p. 133)」。この誤解を突き崩す突破口を開くこと、これが本稿の課題である。「志向的对象」という概念は、「意味」と「対象」という概念対が問題となる場所で両者のあいだを彷徨う亡霊のように現れる。この亡霊の立ち位置を巡って、解釈者たちの混乱が始まる。あるときは意味として(cf. Atwell, 1969, pp. 90-93; 宮坂, 2006, p. 35)、あるときは対象として(cf. Zahavi, 2003, p. 22; Dummett, 1993, pp. 224-229)、またあるときには、現実の対象とも意味とも異なるような対象の心的代替物として(cf. Bell, 1990, pp. 133-140)。この混乱に終止符を打つための明瞭な解釈の地平を切り拓くこと、その道筋を示すために、本稿ではフレーゲ的意味論を補助線として用い、フッサールの議論を整合的に読み解くための骨組みを描きたい。具体的には以下の手続きをとる。まず、「志向的对象」という概念を初期志向性理論におけるそれに限定し、「初期志向性理論」という呼称によって『論理学研究』初版までのフッサールが展開した理論形態を指す。はじめに、そこにおける「志向的对象」という概念の問題点の所在を、「志向的对象」論文と『論理学研究』¹のテキストを用いて確認する(第二章)。次に、志向的对象の位置づけに関するひとつの解釈として、先に述べたテーゼを含む David Bell の解釈を紹介する(第三章)。そして、ベルがフッサール解釈における参照項として用いているフレーゲ的意味論を暗黙の補助線として、ベルに対する代案として本稿の解釈を提示し、ベルの解釈が回避しようとした困難の解決策を示す(第四章)。

2. 「志向的对象」を巡る問題

告知、意味、対象という関連し合う言い方は、すべての表現に本質的に属している。(XIX/1, p. 56)

表現の告知機能とは、その表現の発話によって、発話者が何らかの心的作用を遂行していることが聞き手に示されるような事態を指す。それゆえ、ここで問題になっている本質的な関連とは、作用と意味と対象の三層構造である。これは表現についてのものであるが、表象の構造、より一般に志向的体験としての作用の構造に関しても、フッサールは同様の関連を設定する。

しかし、この三者の関係はそれほど明瞭に整理されているとは言い難い。とりわけ解釈者たちを混乱に招く元凶になったのは以下の箇所である。

¹ とくに断らない限り原則として初版を用いるが、初版の論旨をより適切に理解するための補助テキストとして有用と思われる表現が用いられている場合には第二版を利用する。

作用の対象として解された志向的内容に関しては、以下のものが区別されねばならない。すなわち、それが志向されているようなものとしての対象(*der Gegenstand, so wie er intendiert ist*)と、端的に、志向されたものである対象(*schlechthin der Gegenstand, welcher intendiert ist*)とである。(XIX/1, p. 414)

これに続く箇所では挙げられている例は、端的にいえばドイツ皇帝という同一の対象であるものが、皇帝、ドイツ皇帝、フリードリヒ三世の息子、ヴィクトリア女王の孫、等々の異なる仕方で志向されるというものである。この箇所は、端的なドイツ皇帝その人とは別に、こうした異なる「与えられ方」を刻み込まれた異なる「志向的对象」という存在者を設定するという解釈に人を誘う。じっさい、ここは異なる箇所から採られた例を用いてではあるが、アトウェルは「イエナの勝者」と「ワーテルローの敗者」というふたつの表現の直接的対象、志向的对象として、イエナの勝者であるものとワーテルローの敗者であるものという異なる対象を割り当てる解釈を行っている。彼は、そうした直接的対象がフランス史に関する知識と組み合わせられることによって初めて、ナポレオンという端的な対象、間接的对象に指示が差し向けられると考えている(Atwell, 1969, pp. 90-91)。かくして、現実の対象とは別に志向性の直接的相関者として想定された「志向的对象」なる階層が設定される。先に述べたようにベルもまた、現実の対象とは別に用意されるべきものとしての「志向的对象」を設定する論者である。三層構造を掻き乱す第四の項として、不明瞭な存在論的身分の狭間を彷徨う亡霊「志向的对象」。ではそもそもこの概念は、どこから這い出してきたのであろうか。

まず、フッサールの作用概念にとって、布伦ターノから受け継いだ「志向性」という規定がもっとも重要であることは周知のことであろう。では、「志向性」とはそもそも何なのであろうか。フッサールは、心的作用という意味での「意識」という概念の本質規定として、布伦ターノが挙げた諸規定のうちのふたつの規定を問題にすると述べ、そのうちのひとつとして志向性を論じている。

我々が優先的に取り上げるふたつの規定のうちの一方は、心的現象ないし作用の本質を直接的に示している。その本質は任意のどの例においても明白に現れてくる。知覚においては何かを知覚され、像表象においては何かは像的に表象され、言表においては何かと言表され、愛においては何かは愛され、憎しみにおいては何かは憎まれ、熱望においては何かは熱望される、等々。(XIX/1, p. 380)

かくして、「意識とは何かについての意識である」というよく知られた特徴づけが志向性概念に対して与えられる。考えていた対象がたとえ現実世界には実在しなかったとしても、何も考えていなかったわけではない以上、何について考えていたのかという对象的関係は、その思考にとって本質的な特徴づけである。

しかし、そうしたすべての志向的体験、心的作用にとって対象への関係が本質的であるという思想は、「無対象表象問題」という困難にぶつかる。ここでは、「志向的对象」論文に従って纏めておきたい。

心的作用はすべて何らかの対象に向かうという志向性理論の基本テーゼに従えば、

すべての表象はそれが表象する対象をもつ。しかし、対象をもたない表象というものもまた存在するように思われる。すべての表象に対応するといわれる対象概念と、ある表象には欠けているといわれる対象概念、このふたつの異なる対象概念を適切に位置づけ、その関係を整理すること、これが「志向的对象」論文の主題である。

「『丸い四角』という表象は、同時に丸くかつ四角いような対象を表象するのであるが、しかしもちろんそのような対象は存在しない」と有意味に述べることができるし、またそれは疑いなく正しい。そして他の場合にも同様である。我々は $\sqrt{-1}$ のような「虚」数について語り、「レルネの獅子」²のような神話の中の虚構的对象について語る。そうした関連する表象においては、不可能な対象や虚構的な対象が表象されるが、しかしそれらは実在しないのである。(Schuhmann, 1991, pp. 142-143)

ここでの論述を敷衍してみよう。そもそも「丸い四角」という表象が何の対象も表象しないのであれば、「それが表象している対象は存在しない」と述べることもできない。それは何も表象しておらず、それが表象しているものという指示が成り立たないからである。それゆえ、不在の対象について語るためにこそ、対象への志向をすべての表象に認めなければならないという逆説的な要求が生まれる。指示に失敗するためには、指示を試みなければならないのである。

したがって、有対象表象に対して主観的表象自身、客観的表象ないし意味、そして対象という三層を区別すべきであると同様に、無対象表象についてもその三層は概念上厳格に区別されねばならない。このことをフッサールは以下のように論証する。

まず、有対象表象の場合の実在する対象の位置に無対象表象の場合には主観的表象が対応するという解釈が検討される(cf. Schuhmann, 1991, p. 143)。この解釈の難点は、この意味論を採用した場合に無対象表象を主語とする非存在命題の真偽が適切に説明できるかどうかを考察すれば直ちに明らかとなる。つまりこの場合、「現在のフランス国王は存在しない」のような真であるべき非存在言明は、すべて端的に偽になってしまうからである。というのも、「現在のフランス国王」という表象の対象として割り振られるものが心的な像であるならば、それはれっきとした実在する心像として我々の心の中に存在するからである。それがこの表象の対象であるのならば、この表象の対象は、存在する。同様に、主観的表象をあきらめて客観的表象、すなわち意味と対象を同一視することもできない。というのも、単なる無意味な語音の寄せ集めと違い、こうした無対象表象には理解可能な意味は存在しているからである。それゆえ、意味が存在する以上、存在しないとされている「対象」を意味と同一視することもまたできない。かくして、無対象表象と思われた表象の場合でさえ、表象そのものとも意味とも異なる第三項としての対象、「志向的对象」が存在しなければならないように思われるのである。亡霊の登場である。表現がフレーゲの意味での「意味(Bedeutung)」³を欠くことはありえるが、フッサールの意味での志向的対

² ヘラクレスの12業にある「レルネのヒュドラ」と「ネメアの獅子」の混同と思われる。

³ 以下、フレーゲの術語としての“Bedeutung”の訳語として「意味」という語を用いる際には、引用符つきの「意味」を用いる。

象を欠くことはありえないとベルが主張するとき、彼はこのように要請された亡霊の存在を真に受けているのである。

対象だけではない。この問題は、意味のレベルにも浸食する。フッサールの定義においては、表現の意味とは、表現の対象を志向する仕方、対象の与えられ方である(cf. XIX/1, pp. 54-55)。しかし、無対象表象の場合はどうだろうか。もし対象がまったく存在しないのであれば、その表象ないし表現の意味とは、いったい何に対する向かい方、関係の仕方なのであろうか。そもそも意識に対して与えられてくるべき対象が存在していないのであれば、その現れ出るアスペクト、意識において纏う感性的衣装、知覚的射映、空間的配置、そうした特徴づけをなすべき「それ」が存在しない。ないものの与えられ方、ないものへの向かい方、そのような仕方の特徴づけられた無対象表象の意味とは、極めて不明瞭なものではないだろうか。有意味な無対象表象は存在するのか、その意味はいかにして特徴づけられるのか。「志向的对象」概念を巡る解釈に決着をつけるには、この問題も解決できなければならない。

以上で、問題の所在は確認された。本稿の立場は、志向的对象とは端的に対象のことであり、現実の対象をもつ表象においてはその志向的对象はその現実の対象と完全に同一であり、無対象表象の場合にはその志向的对象であるといえるものは一切存在せず、にもかかわらずそれら無対象表象は明確に規定された意味をもちうるという立場である。その議論を展開するために、最も明白な形で対立する解釈を打ち出しているベルの議論を参照したい。

3. David Bell の志向性解釈

Husserl, 第一部 'Naturalism', 第二章 'Logical Investigations', 第七節 'Meanings and Language' において、David Bell はフレーゲとフッサールの意味の理論について、それぞれ八つのテーゼをあげて検討することによって両者の比較対照を行っている。フッサールの理論を検討するために、比較対照としてはじめに列挙されるフレーゲ側のテーゼは八つあるが(Bell, 1990, p. 130)、本稿が焦点を当てるのはそのうちの第四テーゼ、

F4) 固有名の「意味」は、その名前の担い手であるところの対象である。これに対して、対応するフッサール側の見解をひとつひとつあわせる形で、解釈上の問題点を吟味しつつこちらも八テーゼが挙げられるが(Bell, 1990, pp. 131-140)、先のフレーゲ側第四テーゼに対応するフッサール側の第四テーゼは以下である。

H4) 固有名が向けられている志向的对象は、その名前の現実の(actual)担い手ではない。

第四テーゼは、固有名のフレーゲ的「意味」が現実の対象であるのに対し、フッサールの意味での固有名の志向的对象は現実の対象ではないと主張する。この解釈は、多くの論者が指摘するように、フッサールのテキストに明白に矛盾する⁴。作用のもつ志向性の一般的な構造分析を主題とする『論理学研究』第五研究において、フッサールは「志向的対

⁴ 専門的なフッサール研究者でない論者から指摘されるほど明白に。とりわけダメットの批評は参照する価値がある。Dummett, 1993, pp. 224-229.

象」という概念を以下のように用いている。

志向的内容の第一の概念については、面倒な予備的説明は必要ない。それは志向的对象に該当し、たとえば我々がある家を表象しているならば、まさにこの家のことである。(XIX/1, p. 414)

家の表象に対応する志向的对象とはまさにその家そのものであり、家以外のなにものでもありえない。このことは、より一般的には以下の箇所に明示されている⁵。

一方の「単に内在的」もしくは「志向的」諸対象と、他方の、場合によってはそれらに対応する「現実的」かつ「超越的」対象とのあいだに、そもそも何らかの实的区別を行うならば、それは重大な誤謬である。(XIX/1, pp. 438-439, 第二版)

それゆえ、現実の対象と区別され、それと同一ではないような特殊な対象カテゴリーとして「志向的对象」という概念を規定しようとするベルの解釈は、フッサールのテキストに抵触するという指摘に容易に晒されるのである。

では、何故ベルはテキスト上の証拠にこのような過剰な負荷のある解釈をあえて展開するのであろうか。志向性理論の整合的解釈として自身のテーゼを擁護する議論を、ベルはジレンマの形での問題提起によって展開する。志向性は、志向される対象が実際に存在することを要求するという本来の意味で関係的なものなのか、それとも、たとえ対応する適切な対象が実在しなくとも心的作用を特徴づけているような擬似関係的なものなのか。一般的にいつて関係というのは複数の対象の間に成り立つものであるから、相手となる対象のいなし作用に対して関係を語ることはできない。フッサールのいう志向性とは、関係なのか、そうでないのか。

ベルは、一見してどちらの選択肢も不可能に見えるという意味で、この問いがジレンマであるという。まず、関係的な解釈が不可能に思われるのは、虚構や幻覚においても我々が何かについて考えるということを説明できないように思われるからである。

私がシャーロックホームズについて考えているとき、私が視覚的ないし聴覚的な幻覚にとらわれているとき、あるいは私が夢を見ているとき、私がそれについて考えたり経験したりしているそのものであるような現実のもの(an item in reality)に対するいかなる関係も私はもっていない。しかしそうした状況においても、私が何かについて考えたり何かを経験しているのだということは同様に明らかである。(Bell, 1990, p. 133)

この後者の事態を、関係として解釈された志向性によって説明することは困難である。関係説を押し通そうとするのであれば、実在する対象についての単称的思想(単称言明によって表現されるような思想)と、実在しない対象についての単称的思想というふたつのケースに対して、根本的に異なる説明を用意しなければならない。しかし、対象が実際に存

⁵ 当面の論点との対応が見て取りやすい表現に改められているため、第二版からの引用を用いる。

在するかどうかによって、我々のもつ単称的思想自体の性質に際立った違いが現れるようには思われないとベルは主張する。

セントニコラスには髭があると私が考えるときと、サンタクロースには髭があると私が考えるときとは、考えるという作用に関する限り、本質的に異なっているように見えず、同じひとつの理論に訴えることで説明可能な同じタイプの作用として扱われるに値する。(Bell, 1990, p. 133)

他方、非関係的な解釈の場合には、こうしたケースは問題にならない。志向性を関係として解釈しないタイプの理論は、志向性を、対象との間ではなく心的作用単体に帰属するような作用の性質として説明する。サンタクロースについて考えるという作用は、単に、対サンタクロース的な仕方として特徴づけられるようなある特定の仕方では思考作用を遂行しているということに過ぎない。それは作用の性質、作用の様式なのである。それゆえ、相手となる対象の有無はそもそも問題にならない。志向性とは、いかなる仕方では考えるか、いかなる仕方では経験するかという体験様式の問題なのであり、それゆえ、この解釈は志向性の「副詞的」理論と呼ばれる。

だが、副詞説にも難点がないわけではない。というのも、志向性がもし心的作用それ自体の性質、単に心的な性質なのであれば、それがいかにして現実と関わるのか、志向的对象がいかなる意味で実在する現実の対象と同じものでありうるのかが不明瞭であるとベルは主張する。

こうしてジレンマの形で問題を定式化した上で、最初に思いつくであろう解決策としてベルは以下のような立場を記述する。すなわち、現実の対象が存在する場合には志向的对象と現実の対象を同一視し、存在しない場合には副詞説的な説明をするという仕方では、関係説と副詞説を調停しようとする立場である。この立場に対して、ベルはふたつの反論を行う。ひとつめは、その立場は結局のところ志向性を説明する一様なひとつの理論をつくっていないということである。作用の志向性を説明するためにはその仕方をふたつの別の理論から選択しなければならず、しかもその選択は、現実の対象のうちに対応物があるかどうかという、志向的作用そのものにとっては外的な要因によって左右される。このことが不自然であり信じがたいというのが、ベルの第一の反論である。この反論に対して、ベルの擁護しようとする解釈よりはむしろ理論の一様性を放棄することを選ぶという可能性もある。実際、Peter Simons は Simons, 1995, p. 116 において、『論理学研究』のフッサーは外的対象への問いに背を向け切れていなかったのであり、対象をもつ作用ともたない作用を区別する以上、意味論は一様ではありえないと主張する。だが、サイモンズのこの主張は、少なくとも『論理学研究』解釈に関する限り明らかに誤っている。現実世界における対応する対象の存在という作用に外在的な要因によって、志向性の説明様式の一様性が破壊されることはない。このことは、『論理学研究』の以下の箇所から明らかである。

意識にとっては、表象された対象が実在しようと、あるいはそれが捏造されたものであれ、ひょっとすると背理であるとしても、与えられたものは本質的に相等的なものである。私はビスマルクと同様にユピテルを表象し、ケルンのドームと同様にバビロ

ンの塔を表象し、正千面体と同様に正千角形を表象するのである。(XIX/1, p. 387)

対象が実際に対応するかどうかは作用にとって外的であるから、作用の内容のみに注目するために、対象が対応するかどうか不明であるような例をとるとわかりやすい。たとえば、「完全数であるような最小の奇数」という名辞(確定記述句)を取り上げよう。この表現を我々は問題なく理解できる⁶、しかし、奇数の完全数がそもそも存在するかどうかは知られていない。そこで、奇数の完全数が存在する場合と、しない場合を想定しよう。奇数の完全数が存在した場合、「完全数であるような最小の奇数」という表現の対象はただひとつ存在する。他方、奇数の完全数が存在しないことが判明した場合、その表現はじつは対象を欠いていたということになる。さて、問題は、このふたつの場合に、その表現で我々が理解していたものが本質的に異なっていたといえるかどうかである。対象が見つかるか見つからないかの違いがある以上、もちろんある意味では違いはあったのである。しかし、いずれであるかが判明する以前にその表現を理解できていたとするならば、我々の理解した内容、意味はいずれの場合にも等しいはずである。前者のケースの場合に当の作用に帰せられる所与と、後者のケースで帰せられる所与とは等しい。つまり、両者は結果的にはなんらかの違いを生じるということも説明しなければならないが、他方、その対象への志向性について、本質的に異なるふたつの説明様式を採用しなければならないとは思えないのである。少なくとも、『論理学研究』のフッサールがそうした説明を欲したとは考えられない。

現象学的考察にとっては、対象性それ自身は無に等しい。というのも、それは一般的にいて作用にとって超越的であるからである。どのような意味で、またいかなる権利でその「存在」を語ろうと、あるいはまたその対象性がレアルであろうとイデアールであろうと、あるいは真実であれ、可能的であれ、不可能であれ無関係に、作用は「それに向けられて」いるのである。(XIX/1, p. 427)

したがって、サイモンズの『論理学研究』解釈は受け入れがたいものであり、ベルが第一反論の根拠として用いた意味論の一樣性という前提は受け入れざるをえない。

この第一の反論に続いて、ベルは第二の反論をただちに提示し、こちらがより重要であると主張する。その重要な第二反論とは、志向的对象が現実の対象と同一であるという主張はそもそも理解不可能だということである。志向性の説明において副詞説を基礎に採るならば、志向的对象とは我々の心的作用そのものに内属的な何かである。それゆえ、それは外的世界に実在する諸事物と同一ではありえない。そうベルは考えている。以上のことから、志向的对象と現実の対象との非同一性テーゼ、先の第四テーゼ H4 が導出されるのである。

そして、志向性の一樣な説明のために副詞説的な解釈を基礎とする以上、すべての作用

⁶ 完全数という概念を知っていれば、自然数 x が完全数であるといわれるのは、 x 自身を除く x のすべての約数の総和が x と等しくなるとき、かつそのときに限る。たとえば、6 の約数は 1, 2, 3, 6 の四つであり、6 自身を除く約数の総和は $1+2+3=6$ であるから、6 は完全数である。

に対して志向的对象が存在するとベルは主張することになる。フッサールの意味の理論がフレーゲの意味の理論とはそれほど似通ってはいないこと、フレーゲの「意味」とフッサールの志向的对象とが同一視しえないことを示すために、表現が前者(すなわち現実の指示対象)を欠くことはありえるが後者にはそれがありえないということをベルは論拠として用いるのである。

以上が、ベルの解釈と彼自身がその論拠と看做すものの概要である。しかし、ベルの副詞説批判は副詞説に対する大きな誤解と過小評価に基づくものであり、初期志向性理論を整合的に解釈するためには、ベルのようにテキスト上の証拠に強引な負荷をかけてまで副詞説を回避する必要はない。

4. 「志向的对象」解釈

はじめに、ベルの解釈がフッサールのテキストといかに齟齬をきたすかについて詳しく確認しておきたい。「実際の対象」と「志向的对象」というふたつの異なる対象を並立させることをフッサールが明確に拒否している箇所は『論理学研究』にも「志向的对象」論文にも数多く存在する。

この論文では、すべての表象が対象をもつという言い方を非本来的な言い方として斥け、本来的に言えば無対象表象にはそもそも対象にあたるものがまったく存在しないという立場を採る。

それに応じて、あらゆる表象は外延をもつ、それぞれの対象を表象するという話は、単に非本来的な語り方として解釈されなければならない。その本来的な意味は、「あらゆる表象は、それに対して付属する肯定的な存在判断が妥当とするならば、外延をもつ、ひとつ以上の対象を表象する」という命題によって表現され、もしくは間接的に示唆される。(Schuhmann, 1991, pp. 154-155)

したがって、存在判断が妥当しない命題には、対象も、ない。現実の対象の代わりの影のような、亡霊のような代替物が対象としてあるのではなく、対象は、端的に、ない。このことは『論理学研究』においても明言される(XIX/1, pp. 386-387, 439)。かくして、実際の対象、現実の対象、真なる対象等々といわれるものと、無対象表象にも見出されるような単なる「志向的对象」との区別は必要がない。

だが、まだ問題は解消していない。無対象表象を含むすべての表象において意味とは別に対象への関係が必要とされていた議論はどうなったのか、そしてとりわけ無対象表象において意味はどのように特徴づけられるのか。これらの問いに答えていこう。

まず、フッサールにおいて対象という概念が本来もっている中心的意義を確認しておきたい。じつは、フレーゲの意味論において対象への指示という概念が命題の真偽を説明するための意味論的値という概念と結びついているように、フッサールの場合にも、対象

⁷本稿のもとになった口頭発表原稿では、フレーゲ的な意味論の枠組みについて検討する章が存在した。紙幅の都合により割愛せざるをえなかったが、初期フッサールの志向性理論を理解するうえで

の概念は真理の概念と結びついている。

存在ということで「レアルな」存在だけを、対象ということでレアルな対象だけを理解することに慣れた人にとっては、普遍的对象とかその存在というような言い方は、根本的にまちがっているように思われるであろう。それに反して、そのような言い方をまずはある判断の、すなわち数や命題や幾何学的形象などについて下された判断の妥当性に対する指標として単純に受け取り、そしてその上で、他の場合と同様この場合にも、それについて判断が下されるものに対しては、判断の妥当性の相関者として、「真に存在する対象」という名称が明証的な仕方と与えられなければならないのではないかと自問する人にとっては、ここには何の障害も見出されないであろう。(XIX/1, p. 106, 第二版⁸)

それについて何かを述べる判断が真である以上、それがまさに成り立っているところのそれ、判断の主語の指示対象が存在しないというのは意味をなさない。つまり、フッサールにおいて対象とは、判断が成り立つところのそれ、という形で真理と相関的に考えられている。

そして、フッサールが明証的と認める真理は、レアルな物理的对象に関する主張に限定されない。数学の定理や、論理学の理論も真理であるし、何かが不可能であるという真理は、そこに不可能性が存しているという、不可能性についての真理でもある。もちろん、存在という語は物理的对象を典型として考えられがちである。しかしそれは、本来の原始的な存在概念、判断という論理的形式から考えられた普遍的存在概念をその一部に限定して用いたものに過ぎない。

存在(Existenz)という術語はしばしば、レアルな現実の内部での現存(Dasein)、存在という意味で使用される。ここでは原始的でより普遍的な存在概念が内容的に豊かにされていて、その外延がレアルな対象に狭められているのである。真理、命題、概念といったものもまた対象であり、それらについてもまったき本来の意味において存在ということがいわれるのであるが、しかしそれはレアルな現実において見出されうるような何ものでもない。「Aがある(Es gibt ein A)」という表現が意味と真理を要求するのと同じだけ、存在概念の領域も同じ広さに達するのである。(Schuhmann, 1991, p. 158)

それは、存在命題の意味を説明するための相関概念としての対象の存在であり、レアルなものについてでない形式の表現が可能である限り、存在はレアルなものに限定されない。

多くの場合に我々は、一切知覚可能でないものが存在するということを確かにいいう

ダメットらのフレーゲ解釈がいかに強力な補助線となりうるかは他日を期して詳論したい。

⁸表現がより明白な第二版を用いる。

る。たとえば、過去ないし未来、欠如、不可能性は知覚可能でなく、にもかかわらず我々は、「過去がある(es gibt)」、「不可能性がある(es gibt)」などというのである。(Mat. I, pp. 215-216)

また、作用能力(Wirkungsfähigkeit)が存在の定義として役立ちえないこと、「作用しうる(wirkend zu sein)」という意味における「現実性(wirklichkeit)」は存在者としての存在者の固有性(Proprium)ではないということについても容易に確信されよう。ただレアルなものだけが作用しうるのであるが、あらゆる存在者がレアルであるわけではない。不可能性は実在しえるが、しかしレアルではありえない。欠如、相等性の関係、相違の関係なども同様である。(Mat. I, p. 216)

かくして、イデア的対象や抽象的対象を含め、我々が存在すると述べるを得ないところの対象は、すべてその存在を認められる。これは何も無茶な主張でもなければ神秘的な主張でもない。6 という自然数が確かに存在するのだと主張することは、それが偶数であり、完全数であり、3の倍数であり、といった判断の妥当性を説明するような相関者が存在するということであり、それらの諸性質を満たすものがあると述べているに過ぎない。算術的真理の要求していないような存在概念の他の含意、たとえばこの世界のどこかに空間的位置を占めていて移動すれば探し当てることができるとか、質料をもつとか触れることができるといったことには一切コミットする必要がない。

では、意味はどうだろうか。無対象表象の場合に意味をどう特徴づけられるかということ、これが当初の課題のひとつであった。対象の存在が保証されていない例として、先に挙げた「完全数であるような最小の奇数」という例を採ろう。我々はこの表現の意味を理解できる。何故だろうか。我々は完全数の意味も奇数の意味も知っている。したがって試しに数が与えられれば、(計算に時間がかかることはあるとしても)この表現の対象として条件を満たしているかどうかをきちんと判定できると思っている。対象はまだ見つからないし、見つからないかもしれない。しかし、見つけるにはどうすればよいか、見つけたといえるための条件は何かを我々は知っているのである。じっさい、「完全数であるような最小の奇数」を機械的に捜す手続きは容易に構成できる。たとえば、最小の奇数を捜せばよいのであるから、1から検討を始め、完全数でなければ2を加え、検討し、完全数でなければまた2を加える、というループを繰り返せばよい。これは確定したアルゴリズム、機械的計算手続きであり、もし対象が存在すれば、有限時間内に必ずそれを与えることができる⁹。完全数であるかどうかの判定が少々煩瑣ではあるが、プログラムの形で書き下すこともできるだろう。であるならば、この表象における対象の与えられ方、すなわち対象を与えるための計算手続きは、明確に規定された形で存在する。結果として対象が与えられるかどうか、プログラムがきちんと停止して返り値を返すかどうかとはまったく独立に、プログラムの形態そのものはすでに書き下されている。ゆえに、無対象表象であ

⁹ ただし、存在しなかった場合には当然無限ループとなり、計算は停止しない。存在すれば必ず有限時間内に成果が出るということと、存在するかどうか有限時間内に判定できるということとはまったく別のことである(cf. Enderton, 2001, pp. 61-65)。

ったとしても意味は対象の与えられ方として明確に規定されるのであり、そしてその意味は対象の存在・非存在に関わらず等しいものである。こうして、意味に関するフッサールの主張は整合的に解釈することができる。

この限りにおいて、フッサールのいう志向性は関係說的にではなく副詞說的に解されねばならない。しかしベルはここで副詞説の真意を誤解したのである。たしかに我々は、

「完全数であるような最小の奇数」を与えるようなプログラムを書き下せるし、それに対応する理解をこの表象の意味としてもつことができる。そして、対象がまだ与えられず、与えられるかどうかさえわからないにも関わらず、このプログラムの返す値はまさに「完全数であるような最小の奇数」であるような自然数以外ではありえない。つまり、志向的对象はその現実の担い手以外ではありえないのである。しかし、このことは何も、このプログラム自体がその完全数であるとか、プログラムのソースコードの中に実在する何かはその完全数であるというようなことを何も含意しない。何が対象であるかを定め、その与え方を確定するものが意識の内在的性質だとしても、それはその内在的性質が与えられる予定の対象それ自身であることとは別のことなのである。

無対象表象において、対象は存在しない。いかに亡霊的な、影のような存在者であれ、その表象の対象としての資格における限り、一切何もものも存在しない。しかしそれは、有意味な無対象表象においてその対象が何であるかという非本来的な語り方を排除しない。というのも、エラーに陥ったプログラム、無限ループを鋭意遂行中のプログラムに対して、それが返すはずだった値がどんな条件を満たすものであるかということは、いくらでも語る余地があるからである。丸い四角形を作図するプログラムが任務を成功裏に完遂することはない。しかし、そのプログラムがもし成功するならば結果は丸いはずであると述べることは可能である。成功したならば得られるべき結果について語ったからといって、それだけで結果が出たことにはならないのである。あまりに明白な事柄に贅言が過ぎた。そう、「志向的对象」という概念の亡霊がいかにして払われるべきであるかは、もはやあまりに明白である。

参考文献表

- John E. Atwell, "Husserl on Signification and Object," 1969, reprinted in Mohanty, 1977.
David Bell, *Husserl, The Arguments of the Philosophers*, Routledge, 1990.
Michael Dummett, "Frege and Husserl on Reference." in Dummett, 1993, pp. 224-229.
Michael Dummett, *The Seas of Language*, Clarendon Press, 1993.
Herbert B. Enderton, *A Mathematical Introduction to Logic*, second edition, Harcourt Academic Press, 2001.
Jitendra Nath Mohanty (ed.), *Readings on Edmund Husserl's Logical Investigations*, Martinus Nijhoff, 1977.
Karl Schuhmann, "Husserl's Abhandlung "Intentionale Gegenstände" Edition der ursprünglichen Druckfassung," *Brentano Studien* 3 (1991), pp. 137-176.
Peter Simons, "Meaning and Language", in Barry Smith et al. (eds.), 1995, pp. 106-137.
Barry Smith & David Woodruff Smith (eds.), *Cambridge Companion to Husserl*, Cambridge University

Press, 1995.

Ernst Tugendhat, "The Meaning of 'Bedeutung' in Frege", *Analysis*, 30. 6, 1970, pp. 177-189.

Dan Zahavi, *Intentionalität & Konstitution: Eine Einführung in Husserls Logische Untersuchungen*,
Museum Tusulanum Press, 1992.

Dan Zahavi, *Husserl's Phenomenology*, Stanford University Press, 2003.

宮坂和男, 『哲学と言語——フッサール現象学と現代の言語哲学——』, 広島修道大学学
術選書 36, ナカニシヤ出版, 2006.